



青少年赤十字だより 第32号

JRCとやま

今の教育で大切なことが、 青少年赤十字活動の中にある



富山県青少年赤十字指導者協議会

会長 鳥内 禎久
(高岡市立野村小学校長)

令和4年、青少年赤十字は創設100周年を迎え、記念の年となりました。本来なら、青少年赤十字の果たす役割とは何か、また学校ではこれを受けて何をすればよいのかを考え、行動する絶好の年になるはずでした。しかし、残念ながら、今年も新型コロナウイルスの感染拡大が続き、学校現場は、様々な行事が中止や規模縮小を余儀なくされ、子供たちはもとより教職員も大きなストレスを感じていました。一方で、ウィズコロナからアフターコロナに変化する中、学校の存在意義を再確認し、教育活動を見直す大きなチャンスでもありました。コロナ感染防止のために「できない」ではなく、コロナウイルスを正しく恐れ、感染防止対策を講じながら「できる」ことを模索

し、子供たちが自ら育つ場を設定することが大切であることに気付くことができたのです。そんな中、今年度活動実践校になったA小学校の校長先生から、「コロナ禍において、青少年赤十字活動をどのように進めていけばよいのか」と相談を受けました。私は、青少年赤十字の指導講師として長年ご指導いただいた上野紀一先生から頂いた資料を参考に、「生きる力×JRCは、思いやりと行動力を育むことができる」、「青少年赤十字活動は、子供たちの可能性を広げることができる」、「体験から学ぶことは、子供たちを大きく飛躍させることができる」等これらのキーワードを中心に説明しました。後日、A小学校の校長先生が再び来校され、「青

少年赤十字活動の柱である、『思いやりの心』や『人の役に立ちたい』、『社会の役に立てる人になりたい』という気持ち育てること、そして、それを自分で『気づき、考え、実行する』子供たちを育てることは、本校が学校教育全体で育てようとしていること何ら変わらないんですよ」と力説され、私はとても嬉しくなりました。つまり、コロナ禍の中、『今の教育で大切なことが青少年赤十字活動の中にある』と気付かれたのです。

さて、令和5年度から、新型コロナウイルス感染症が2類から5類に引き下げられるのに伴い、青少年赤十字の中心事業である、「リーダーシップ・トレーニング・センター」についても見直しが求められることとなります。ぜひ、今年度実施できなかった、宿泊で、トレセンの醍醐味である「フィールドワーク」や「手話」、「救急法」の活動と共に、ボランティア・サービス(VS)やホームルームの取組が充実することを期待してやみません。

終わりになりましたが、本年度、私たちの青少年赤十字活動に対し、多大なご指導とご支援を賜りました富山県教育委員会、青少年赤十字賛助奉仕団をはじめ、関係各位に心よりお礼申し上げますとともに、今後一層のご指導・ご鞭撻を賜りますようお願い申し上げます。

青少年赤十字活動研究会

1月19日(木)、日赤富山県支部において、「令和4年度青少年赤十字活動研究会」を県教育委員会と共催で開催しました。今回の研究会は、参集とWEBのハイブリッド形式で行い、県内の小・中・高等学校等教員51名が参加しました。ここに、当日の講演及び活動発表の概要をお伝えします。

〈第一部・講演〉

「オンラインを活用した青少年赤十字の国際交流事業等について」

国際交流事業等について

日本赤十字社 パートナーシップ推進部

青少年・ボランティア課 主事 藤井 理緒氏

コロナ禍で青少年赤十字の活動が多大な影響を受け、リーダーシップ・トレーニング・センターなど子供たちが実践できる活動が中止となっています。

このような状況の中で青少年赤十字メンバー(以下、JRCメンバー)はどのような方法で国際交流しているのかをお話しさせていただきます。

青少年赤十字の国際交流事業は、本社主催の国際交流集会和、支部主催の国際交流集会の2つがあり、本社主催事業は隔年で開催しております。

本社主催の国際交流は、本社が中心となってアジア・大洋州の姉妹社のメンバーを招聘し、約1週間から10日間のプログラムを行います。まずアジア・大洋州のJRC\RYCメンバーに東京の本社に集まってもらい、その後、海外メンバーを受け入れてくれた各都道府県支部でホームステイ等のプログラム(支部研修)を行います。この研修は富山県支部も受け入れをしてくださっていま



す。支部研修を終えたあと、改めて東京の本社に集まり、全国から集まった日本のJRCメンバーたちと一緒に国際交流を行います。平成30年度に開催した際には、日本および20の国と地域から77名が参加しました。支部主催の国際交流は1ヶ国または2ヶ国だけといった少数の国と密接な交流が

きます。たとえば、ある都道府県支部がタイと交流したい場合、タイの赤十字社本社と日赤の本社がやりとりをし、交流を希望するタイの支部を紹介してもらいます。そのあと、タイの支部と都道府県支部がやりとりをする、というような流れで進めることができます。こういった支部単位の交流ができるといったこともぜひ知っておいていただければ、と思います。

コロナ禍前は、対面での交流が主でした。令和2年度からは新型コロナウイルスの影響で海外からの招聘ができなくなり、日本のJRCメンバーも1ヶ所に集まって活動するということが難しくなりました。

そのような状況下でも、世界とつながることができる国際交流の機会を無くしてはならないというところで、初のオンラインでの国際交流の開催に乗り出しました。

結果、令和2年度の開催時は日本および17の国と地域から312名、令和4年度は日本および27

の国と地域から約450名が参加していただけました。

オンラインで開催したことの大きなメリットは、より多くのメンバーたちが世界のメンバーたちと交流する機会を持てたということです。コロナ禍前の対面でのプログラムでは、各都道府県の代表の子供たち1、2名だけが交流していましたが、オンラインでは各都道府県からの参加者に制限を設けなくてよくなりました。

それでは、オンラインでの国際交流を実際どのように行っていたのかお話しします。開催するにあたってまず検討した項目はIT関係です。当時からさまざまなWeb会議サービスがある中で、Zoomを利用しました。一番通信速度が安定していたからです。

国際交流当日の日赤本社(東京)では、職員と語学奉仕団(通訳を担当いただく方)、そして指導者の先生が集まり、運営を行っていました。そして海外の姉妹社の支部職員やボランティア、JRCメンバーとZoomで繋ぎ、さらに都道府県支部の職員やボランティア、指導者の先生、JRCメンバーともZoomで繋ぎました。

次に語学のサポートです。今回は全体の進行を、日本語と英語の両方で行いました。日本のメンバーが英語で話しているとき、他の子供たちが困らないよう、同時進行で語学奉



仕団が訳した字幕を打ち込むということをしていました。場合によっては海外のメンバーが英語で話した後に、語学奉仕団が日本語で通訳をするというかたちで進行していました。

また、オンラインであっても充実した学びが得られるように、各国の違いや同じ部分を見つけれられるようなプログラムを検討し、展開しました。

令和2年度の国際交流では、偏見のない世界をつくるをテーマに、コロナ禍の現状を共有したり、その中で自分たちにできることを考えるというプログラムを行いました。また、各国の青少年赤十字がどんな活動をしているのか、という活動紹介や、ふるさと文化紹介という各都道府県や海外の文化を紹介する時間を設けました。福島県のメンバーがこけしを紹介したり、マレーシアのメンバーも日本と同様に献血推進活動を行っていることが分かったりしました。また、○×クイズをして、海外メンバーと日本のメンバーがそれぞれ自国の赤十字のクイズを考え、ゲームをしました。休憩時間にはインド赤十字社のメンバーが踊りを披露したりして、とても盛り上がりました。参加メンバーからは、「オンラインでも世界の人々と一緒に楽しむことができた」「コロナによる偏見についてあまり考えたことがなかったけれど、誰もが考えるべき問題で、向き合っていかなければならない」という感想があり、考えるきっかけを作ることができたのではないかなと思います。

令和4年度の国際交流では、コロナの状況も変わっていましたが、まだ参集・招聘できる段階ではないということでオンライン開催となりました。令和2年度の国際交流終了後のアンケートでの「オンラインは対面に比べて交流できる時間が短い。もっと交流したかった」という声にお応えし

て2部制にし、全体で3回行うプログラムにしました。

令和2年度は11月15日(日)の1日だけでしたが、令和4年度では10月2日(日)の第1部、11月5日(土)～6日(日)の第2部としました。

第1部で「気づき」を提供し、第2部までの1ヶ月間で「考える」時間を設け、第2部ではデイスカッションをしながら、自分たちが「実行」できることを考える時間を設けました。

また、令和4年度は青少年赤十字創設100周年の記念イヤーということで、例年はアジア・大洋州の姉妹社へ案内をお送りしているところを、今回は全姉妹社へお送りしました。結果、アフリカやヨーロッパの国からも参加者を集めることができ、多くの海外のメンバーと繋がった国際交流になりました。

今回は、「気候変動」をテーマに開催いたしました。実は国際赤十字・赤新月社連盟は、気候変動というグローバルな問題に対して赤十字全体で取り組んでいくという声明を出しています。気候変動の影響を受けるのは将来の世代であるといわれており、メンバー一人ひとりが自分たちにできることを考え、将来に目を向けるきっかけにしてほしいという思いから、このテーマになりました。まず、メンバーたちが気候変動について知らな



くてはならない、ということでも基調講演を行いました。基調講演として、5名程お呼びしたのですが、ここでお見せしているのは、赤十字が気候変動について情報を得られる赤十字気候センターの職員をされているオランダのサネさんと、オーストラリア赤十字社のヘイリーさんです。このお二人に英語で講演を行っていただきました。この講演では同時通訳や字幕などの対応を行い、メンバーたちもしっかりと学ぶことができました。質疑応答も、手上げ機能というものを利用して、自分で手を上げて質問をして、講演者が回答をするという時間を設けました。

意見発表では、「エコ活動やリサイクル活動、節水などをより推進していく」「みんなに知ってもらえるよう情報を共有する」「植樹の活動をする」といった意見がありました。

文化紹介では、英語で資料を作ったり、各国のメンバーに英語で発表したりしている生徒も多かったです。

今回は令和2年度に比べ、日本の子供たちが通訳を介さずに英語で発表する機会が多くあり、とても頼もしく感じました。

また、オンラインでグループ分けができる機能を利用して、5人～10人ずつでホームルームを行いました。令和2年度には行わなかった、支部主催プログラムも、グループ分け機能を利用して行いました。オンラインのよさを活かしつつ、対面でできていたものをオンラインでも近づけるように工夫をしました。

さらに創設100周年のプログラムの一環として「つながるダンスプロジェクト」というものも行いました。日本と海外では、言語の壁、国の壁といったいろんな壁がありますが、音楽とダンスという身体表現を通じて世界と一体感を感じるこ

とができました。

令和4年度の国際交流でも、Web会議サービスのZoomを使用しました。令和2年度と違い、今回は全姉妹社に案内をお送りしたので、画面上に100アカウント載せられる契約から、500アカウント載せられる契約に変更しました。さらに今回はZoomとMicrosoft Teamsを連携させてライブ配信を行いました。なので、時間・時差の問題で参加できない姉妹社が、ライブ配信や録画を共有することで、追って参加できる仕組みをとりました。

オンラインでの国際交流は、IT資機材・語学のサポート・姉妹社の職員・そして指導者の先生など、本当にたくさんの方にご協力いただいて実現したプログラムだったと感じています。

オンラインでの国際交流の報告をさせていただきました。このプログラムを来年度以降も開催しますので、ぜひみなさんにご参加いただき、各国とのつながりを感じていただきたいと思います。

青少年赤十字は国際理解・親善という精神を深めるために、様々な教育プログラムを展開しています。

これからも青少年赤十字の活動をより充実させて発展させられるように、先生方みなさまのお力添えをいただいで精進して参ります。

ありがとうございます。



青少年赤十字創設100周年
そしてこれからも
よろしく願っています！

〈第2部：活動発表〉

「防火の輪を広めよう」〜黒東消防隊〜

入善町立黒東小学校 教諭 勝田 優太 先生

入善町では毎月1日と15日に火災ゼロを呼びかける「無火災の日」の放送が流れていますが、子供たちは火災と無縁の生活を送っているため全く気づいていませんでした。そこで、総合的な学習の時間に防火について学習しました。消防署や消防団で働いている方のお話を聞き、防火への意識を高め、誰かのために働く大切さや命の尊さを学ぶことができました。

さらに、学びを発信するため、学校では校内放送や全校集会で防火を呼びかけ、地域の方々へは自分たちが描いた防火ポスターを公民館に掲示してもらい、達成感を味わうことができました。

「考え、進んで行動（ボランティア）」

「できる子供を育てるために」

委員会活動・総合的な学習の時間を通して
小矢部市立大谷小学校 教諭 松永 深月 先生

挨拶・感謝・清掃・勤労の意識を高める「しあわせ運動」に全校で取り組み、関わり合うよさや喜びを高め合うことができました。

また、作物の栽培や木に関するクイズラリー、学校の象徴となる木を決める総選挙等の活動を行い、植物に親しみ、大切にしようとする心が芽生えました。

他にも、ボランティア講座や車椅子体験を行ったり視覚障害者を支援するために大学と企業が共同で技術開発を行っているお話を聞き、思いやりの心の育成とよりよい社会の実現について考えることができました。

「小学校や地域との協働による

奉仕活動を通じた豊かな心の育成」

舟橋村立舟橋中学校 校長 内生蔵 保人 先生

生徒会によるベクトルボルキャップの回収や校舎周辺と越中舟橋駅での清掃活動を行ったり、赤い羽根共同募金と村文化祭のオープニングで吹奏楽部が演奏したり、「NPO法人園むすびプロジェクト」による「月イチ園むすび」や「年イチ園むすび」の催し物の企画や準備、後片付け、ステージ出演といった地域活動を行ったりしました。また、小学校での絵本の読み聞かせや、中学2年生と小学5年生が意見交換をしあう地域学校保健委員会の活動も行いました。

これらの活動で、他者と関わり合いながら、よりよく生きようとする意欲を高めると共に、社会性の基礎となる自己有用感を育成することにつながりました。

「光中四本柱の一つ『ボランティア』の

活性化に向けた活動の実践」

南砺市立福光中学校 教頭 水口 賢 先生

生徒のSDGsに対する意識を高めるため、福光中学校版のSDGs（「MTGs」）を策定し、活動しました。また、各家庭の役目を終えた制服や体操服を回収する、制服回収ボランティアを行ったり、学級ごとに学校内の花壇の整理や、通路の落葉やごみ拾いを実施しました。

MTGsと制服回収ボランティアは、生徒自身から立案された活動です。今後も生徒のボランティア活動が高まるよう、生徒のアイデアを活かした活動と恒例で行っている活動を両立させたいと思います。

リーダーシップ・ トレーニング・センター

3年ぶりに青少年赤十字リーダーシップ・トレーニング・センターが開催されました。コロナ禍での開催ということもあり、宿泊はせずに日帰り日程で、校種別に日を分けて開催しました。

小学校が8月4日(休)、中学校が8月3日(休)に砺波青少年自然の家で、高等学校が8月8日(月)に高志の国文学館を会場に開催し、県内の小・中・高校生35名が参加しました。

今回は人道について詳しく学び、小中学生は人道を表現するポスター作りを行い、高校生は戦時中の人たちの気持ちになって人道について考えるワークショップを行いました。1日という短い時間ではありましたが、新しく出会った仲間との体験を通して、リーダーシップを高めました。



リーダーシップ・ トレーニング・センター ワークショップ集よ

〈小学6年生 R・Iさん〉
トレーニング・センターで学んだこと

ぼくは、トレーニング・センターで人道とはすごく大切なものと分かりました。人道は、人のことを思ったり考えたりする、思いやりということを学びました。

人道のてきというものも学びました。人道のてきは、人道の反対で、利己心や無関心という気持ちで、それをなくすと、人道をまもることができると分かりました。例えば、自分勝手に行動した

り、困っている人がいても無視したりすることが人道のてきになります。

ポスター作りのとき、みんなが学んだことを生かして、協力してすごくいいポスターを作ることができました。

ぼくも学校や家で、ときどき人道のてきの気持ちになつてしまう時があるので、トレーニング・センターで学んだことを思い出して生かすことができると思います。



〈中学2年生 T・Nさん〉

私はこのトレーニング・センターで2つのことを学びました。

1つ目は気づき・考え・実行することです。人道についての討論のときに、「人道的な考え方として、「人のためにできることをする」という意見が出ました。振り返ってみると、私は周りの人が困っていることに気づいても、なかなか行動に移せていないと気づきました。そのため、これから日常生活の中で誰か困っている人がいたら気づきどうするべきか考え、行動に移せるようにしたいです。

2つ目は協力する大切さです。初めは、ちがう学校の人たちばかりだったのでとても緊張しており、仲良くなれるか心配していました。しかし、グループ討論ではお互いの考えを交換していくにつれ、会話が弾み、自分の意見も深まっていきました。また、ポスター作りではみんなで決めたテーマや考えをポスターに表現できるように協力しました。作業中は声をかけ合ったり、うまく仕事を

分担したりして、みんなの考えが沢山詰まったポスターを完成させることができました。作り上げる段階で意見がまとまったときや、完成したときは、とても達成感であふれていました。それは、自分の考えをしっかりと持ち、真剣に活動に取り組むことができたからだと思います。それから、出会ったその日にこんなにも仲を深められたのは、みんなが協力して1つのことに取り組んだからだと思います。今回のトレセンで学んだことや自分にはなかったホームのみんなの考えをこれからの学校生活に活かしていきたいように頑張りたいです。

〈高校1年生 H・Fさん〉

初めは、30分で遺書の暗記など無理だと思いました。先生にもネガティブな発言をしてしまい、気分が沈んでいました。ですが、グループのみなさんの顔を見ると、マスク越しでも伝わるやる気と楽しさを感じました。役割分担や覚えやすいような工夫もしてくださり、「頑張ろう」という雰囲気の中で、とても楽しく活動できました。

私は、遺書の中の「博愛」という言葉を大切にしていきたいと思いました。人々の気持ちに寄り添い、笑顔を届けることができる看護師を目指していきたいと思いました。

令和5年度 トレセン開催の お知らせ

令和5年度は小学校が8月2日(休)から8月3日(休)まで、中学校・高等学校が8月2日(休)から8月4日(金)までの日程で、富山県砺波青少年自然の家を会場に開催する予定です。開催案内は、5月末頃に加盟校にお知らせします。たくさんの学校から児童・生徒の参加並びに先生方のご協力をお待ちしています。

令和4年度青少年赤十字 創設100周年記念国際交流事業

令和4年10月2日(日)、11月5日(土)、6日(日)に青少年赤十字100周年記念国際交流事業がオンライン開催されました。日本からは29支部220名、海外からは24の姉妹赤十字・赤新月社238名、計458名の青少年赤十字メンバーが参加しました。

10月2日(日)に行われた交流会では、高岡向陵高等学校のメンバー4名が参加しました。

最初に気候変動に関する基調講演を聞き、気候変動が世界に及ぼしている影響や、海外のユースメンバーやボランティアが行っている活動について学びました。

その後、自分たちの身の回りで起こっている気候変動の影響について、海外と国内のメンバーで組まれたグループで話し合い、学んだことを共有して交流を深めました。

参加した生徒の感想文をご紹介します。

『世界を知ること』

今回の青少年赤十字国際集會に参加し、世界の気候変動についてたくさん話を聞いて思ったことは、「他人事ではない」ということです。

異常気象によって洪水が起きることで、食糧困難や餓死に繋がりが、家族が離れ離れになってしまうことを知りました。最近、日本では台風が多いので、雨によって川の氾濫が起こり、洪水になる可能性があることをこれから考えていかなければならないと強く感じました。一人一人ができることを確実に行うことで、気候変動による被害のリスクを減らすことができるということを学び、



から一緒に考えていく機会がこれからも続いていき、増えていくことを楽しみにしています。またこのような機会があれば進んで参加したいと思っています。

『国を越えて学んだこと』

今回初めてこのような活動に参加しました。今回の活動を通して、世界各地で何かしらの気候変動は起きているということが分かりました。そして、まだ知らないことがたくさんあると感じました。その国に住んでいる方々から直接お話を聞くことができると良かったです。

私が一番心に残ったのは、「若い人が行動を起こすことが大切」という言葉です。周りを見て生活をしていないと、問題に気づくことはできないと思います。なので、日々のニュースや新聞を見て、情報を得ていきたいと思えます。そして、どうすればその問題が解決するのか考え、対策をしていきたいです。行動に移すことは、私たちにとても勇気がいることです。なので、少し

ずつ、小さなことでも良いから、周りの人たちに伝えていきたいと思えます。

『気づき、考え、実行する』という言葉を大切に、日々の生活を送っていききたいと思えます。

『気候変動は身近なこと』

気候変動についての講演では、「青少年赤十字のおかげで異常気象や自然災害の際に少ない被害で問題が解決できている」など、JRCの活動で感謝している人たちの存在に、改めて気づかされました。

そのほかにも、「意識」：気づくレベルを上げる、「行動」：小さなことでも行動を起こし、たくさんの人に気づいてもらえるようにする、「啓発活動」：何かあった際、私たち若者の声がたくさんの人に届くよう今から発信していきたい。この3つの大切な言葉を教わりました。また、このような機会があれば参加したいです。



青少年赤十字

創設100周年を迎えました!

令和4年、日本の青少年赤十字は創設100周年を迎えました。大正時代から始まった青少年赤十字の大きなできごとを紹介します。

◆青少年赤十字のはじまり

大正3年(1914年)、第一次世界大戦をきっかけにカナダやアメリカ、オーストラリア、イタリアで青少年赤十字が結成されました。日本では、大正11年(1922年)に滋賀県守山市立守山小学校で、初の少年赤十字団が結成され、全国に順次加盟校が増えていきました。

◆『少年赤十字』から『青少年赤十字』へ

結成当初は『少年赤十字』のことを『少年赤十字』と呼んでいましたが、昭和15年(1940年)から『青少年赤十字』と呼ばれるようになりました。

◆青少年赤十字マークの制定

昭和22年(1947年)には、青少年赤十字マークが制定されました。活動する際に着用するワッペンやバッチ、旗などにデザインされ、創設1



青少年赤十字マーク



創設100周年記念マーク

00周年を記念した青少年赤十字マークもデザインされました。

◆トレセン開始

昭和23年(1948年)には日本最初のトレセンが、神奈川県と岡山県で開催されました。その後、都道府県ごとにトレセンが開催されるようになっていきます。富山県では昭和26年(1951年)に大山町大川寺に20校の生徒が集い開催されたものが最初です。

翌昭和27年(1952年)から射北中学校を会場に第1回中学校トレセンが開催されました。高校トレセンは昭和33年(1958年)、小学校トレセンは昭和34年(1959年)に第1回が開催されました。



高校トレセンの様子

◆『一円玉募金』の活用開始

『一円玉募金』とは、お小遣いを節約して、世界中の苦しんでいる同世代の子供のために募金活動をする事で「奉仕」の心を学び、「国際理解・親善」を図るといふものです。

昭和59年(1984年)からは、この募金をネパールの支援に役立てることになりました。現在はネパールとバヌアツの支援にあてられており、ネパールでは衛生環境の改善を目的として、トイレや手洗い場などの整備を、バヌアツでは自然災害に対する防災意識を高め、知識を深めることを目的として、防災教材を作成したり、防災授業を

行ったりすることに使われています。

◆『まもるいのち ひろめるぼうさい』発行

平成27年(2015年)小・中・高校生向けの防災教育指導案集が発行され、全国の小・中・高等学校に配布しました。この指導案集は、トレセンでの防災講義や全国の学校の授業等で活用されています。

◆『ぼうさいまちがいがし きけんはっけん』発行

平成30年(2018年)幼稚園・保育園向けの防災教育教材を発行しました。奉仕団が訪問し、防災授業等を行う際に活用されています。

◆『新型コロナウイルス3つの顔を知ろう』制作

令和2年(2020年)に制作され、学校の授業や文部科学省の教材として活用されています。



富山県の青少年赤十字の歴史は、大正12年(1923年)から始まっており、令和5年度で100周年を迎えます。

青少年赤十字加盟校および指導者のみなさま方には、今後とも青少年赤十字の指導・育成に格別のご理解とご協力をお願い申し上げます。

令和5年度JRC活動計画

3月	高校生対象 スタディー・センター(山梨県) 高等学校青少年赤十字活動の中心となるリーダーの養成を図ります。
1月	指導主事対象 青少年赤十字研究会(日赤本社) 青少年赤十字活動研究会(富山市) 教職員を対象に、広く青少年赤十字活動を学び、普及することを目的とした研究会です。
11月	青少年赤十字国際交流事業(日赤県支部・本社)
8月	リーダーシップ・トレーニング・センター(砺波市) 県下小・中・高等学校の青少年赤十字メンバーが集まり、共同で生活する体験学習です。チャイムや指示がないため、自分で考えて行動することによって、参加者の自主性を育てます。
7月	全国賛助奉仕団協議会(日赤本社)
6月	全国指導者協議会総会(日赤本社) 第3ブロック指導者協議会長及び支部担当者研究会(静岡県)
5月	指導者協議会 理事会・総会(日赤県支部) 令和5年度 活動実践校指定 トレーニング・センター指導者養成講習会(東京都)

青少年赤十字への加盟について

青少年赤十字は、学校教育の場に組織され、教師が指導者となって、児童・生徒とともに活動に取り組めます。

青少年赤十字に加盟されると、定期刊行物や資料・教材の無償提供、指導者対象の講習会に関する案内、小・中・高等学校の青少年赤十字メンバー対象のリーダーシップ・トレーニング・センターに関する案内等があります。「これをしなければならぬ」といった義務のようなものではありません。地域や世界の人びとの平和や福祉に貢献するような活動を、学校の裁量で自由に行うことができます。なお、加盟登録する上で、経費は一切かかりません。

各学校の教育効果を高めるため、ぜひ青少年赤十字をご活用ください。

令和4年度

新規加盟校

黒部市立荻生小学校 校長 寺島 紀子 全校加盟	富山市立奥田小学校 校長 豊田 高久 学年加盟	富山市立太田小学校 校長 竹内 一 全校加盟
小矢部市立東部小学校 校長 大谷 知康 委員会加盟	南砺市立福光中学校 校長 藤井 一哉 委員会加盟	南砺市立吉江中学校 校長 梨谷 一男 全校加盟
	荒井学園新川高等学校 校長 濱元 克吉 委員会加盟	

発行・編集

富山県青少年赤十字
指導者協議会
日本赤十字社富山県支部

〒930-0821 富山市飯野26-1
TEL076-451-7878 FAX076-451-6872
<https://www.jrc.or.jp/chapter/toyama>

青少年赤十字加盟校状況 (令和5年3月31日現在)

校種	校数	メンバー数
幼稚園・保育園	13園	1,378名
小学校	139校	25,461名
中学校	74校	23,153名
義務教育学校	3校	424名
高等学校	15校	2,064名
特別支援学校	5校	208名
計	249校	52,688名